

Royal College of Art, Design Interactions (RCA DI) の修士課程に所属している牛込陽介です。テクノロジーが人間や社会に与える影響、特に人間の身体の変化について、クリティカルデザインという手法を用いた作品制作や研究を行なっています。



私が東京大学大学院で専攻していたヒューマン・コンピュータ・インタラクションの分野では、情報技術と人間をつなぐ様々な技術や体験が毎日のように発表されています。拡張現実など視覚にはたらきかける技術はもちろん、近年では触覚や嗅覚までもコンピュータとつないだ新たな体験が可能であり、未来の様々な可能性を感じさせてくれます。一方で、こうした応用分野における研究成果には、一過性のエンタテインメントのような側面があるようにも思えます。そこで私は、情報科学の応用成果を異なる分野の研究者や一般の人々へ向けた「未来の問題提起」や「議論の誘発」に発展させられないかと考えるようになりました。そんなときに、RCA DIが提唱しているクリティカルデザインという手法や、そこで生まれた作品を知る機会がありました。クリティカルデザインとは、特定の技術が及ぼす影響について、サイエンス・フィクション作品のように物語とプロダクトを同時にデザインすることによって、人々により具体的な未来像を与え議論を挑発する手法だと私は解釈しています。この考え方に共感し、より深く触れたいと思ったのが、私が留学を考えたきっかけです。

その後、RCAの教授や卒業生との面会、卒業展示の視察などの留学準備を行いました。その中で最も大きな障害になったのが高額な学費です。RCAは美大ですので、理系大学のような奨学制度やRAは望めませんでした。当然、日本の奨学制度を利用することになるのですが、1年先にRCAに留学していた吉本君に教えてもらったのが船井情報科学振興財団の奨学制度です。より実践的な研究手法を確立したいという希望や、新しい考え方と言語で論述を行うことの困難さから、私は博士課程ではなく修士課程に進学しましたが、それでもサポートしてくださっている財団の方々には、心から感謝しております。

まだ新たな生活が始まって1ヶ月しか経っていませんが、作品制作や研究に没頭できる、非常に有意義な時間を過ごしています。留学を経て、情報科学を新たな視点から人々に伝えることの出来る人物になれるよう、精進していきたいと思います。

写真は最初の課題で制作した作品のイメージです。課題は「Design Philanthropy」というテーマで、Vauxhallという地域で起きている地理的・建築的・人種的な変化を文脈として博愛をデザインする、というものでした。私は、互いに言葉も文化も違う人種の間にあって「いつも変わらないけれど見過ごされているもの」に着目し、それらが共通言語となることで緊急事態への啓発を行うプロジェクトを提案しました。写真はホームレスの青年をメディア化する一案で、「もしも核危機が起こったら？」という本を読むホームレスをみたときに、人々が自発的に核危機についての調査・勉強を始めることが狙いです。また、電話ボックスの中で人がしゃべり始めると、あたかも核危機について大声でしゃべっているかのように外に声が漏れでくるというシステムや、道路標識に埋め込んだLEDと通行人の眼球運動を利用したサブリミナルディスプレイなどを提案しました。